

幕末佐賀の 家老たち



いあいさつ

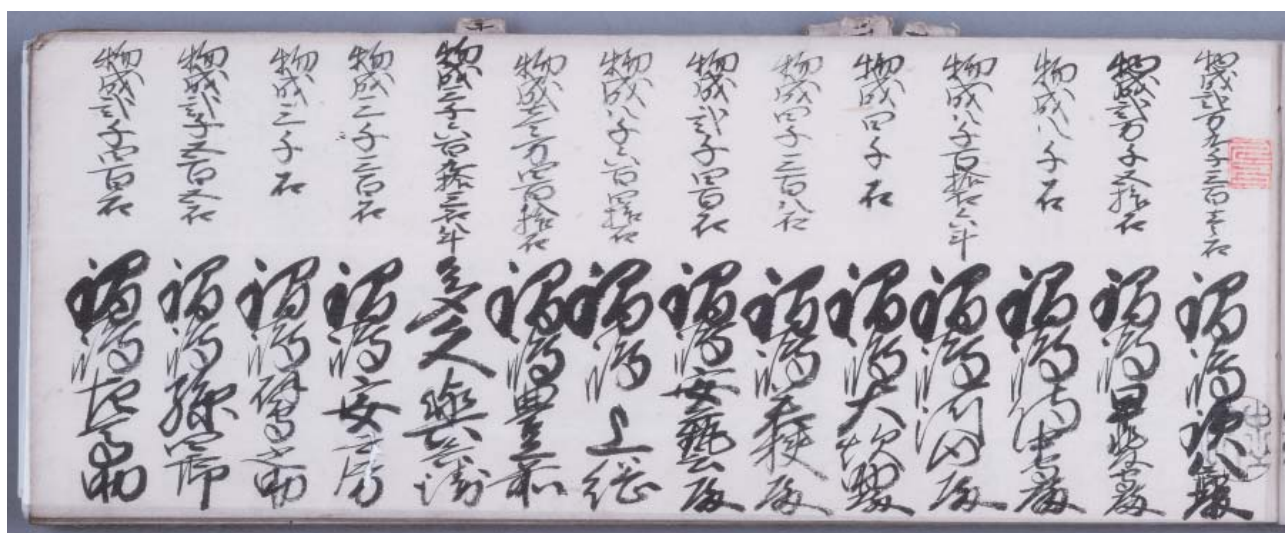
幕末佐賀藩を率いた十代藩主鍋島直正公。その生誕一〇〇年にあたる大正二年（一九一三）に建設された銅像は、太平洋戦争に伴い出征（金属供出）されました。そこで生誕二〇〇年にあたる平成二十六年（二〇一四）から再建の寄附が集められた結果、平成二十九年三月、佐賀城二の丸跡にその英姿が再建されることとなりました。銅像は直正公個人を顕彰するとともに藩の歴史を象徴する存在と言えるでしょう。幕末佐賀藩は長崎港の警備にもつとも力を注ぎ、強大な軍事力を背景に雄藩へと駆け上ります。その原動力は、直正公の圧倒的なリーダーシップと藩士たちの働きでした。

そこで本展では、藩内の融和を目指した直正公と、その意を受けて動いた家老たちについて、嘉永六年（一八五三）頃までの長崎警備を中心にご紹介します。直正公の庶兄で長らく藩政トップの請役当役にあった鍋島茂真（安房／須古鍋島家）をはじめ、直正公と家老たちとの緊密な関係性を通じ、「チーム佐賀藩」の一端を感じて頂ければ幸いです。

平成二十八年十二月五日

公益財団法人 鍋島報効会





物成式万九千三百老石 鍋嶋欽八郎殿(小坡)
 物成式万五千五百拾石 鍋嶋甲斐守殿(蓮池)
 物成八千石 鍋嶋備中守殿(鹿島)
 物成八千五百拾石六斗 鍋嶋河内殿(白石)
 物成四千石 鍋嶋大炊助殿(神代)
 物成四千三百八十石 鍋嶋若狭殿(久保田)
 物成四千四百石 鍋嶋安芸殿(村田)
 物成八千六百四拾石 鍋嶋 上総(武雄)
 物成老万四百拾石 鍋嶋 豊前(諫早)
 物成三千六百九拾二石八斗 鍋嶋 安房(須古)
 物成三千三百石 鍋嶋 鷹之助(横岳)
 物成三千石 鍋嶋 孫四郎(神代)
 物成式千五百五石 鍋嶋左馬助(深堀)
 物成式千四百石

〔積文〕



裏表紙



表紙

〔積文〕

御家中分限帳にそふらふゆゑ
 西肥佐賀藩石井識
 みだりにとりあつかふ間敷御法度の書

4 惣番秩禄

一冊 慶應三年(一八六七)
 縦二六・七cm 横九・七cm
 紙本墨書 冊子装
 公益財団法人鍋島報効会所蔵(石井忠明氏寄贈)

十一代藩主鍋島直大の時代にあたる慶應三年(一八六七)に作成された佐賀藩士の着到。原則として物成高と氏名のみが記載されている。巻頭は三家筆頭の鍋嶋欽八郎殿(小城鍋島家/直正七男)にはじまり、親類(四家・親類同格(四家)・家老(六家)・着座(八家)の計二十五家が記載された直後に「右は御三家・御親類・御同格・御家老・着座迄。尤も右に相洩れ候人は、いろはの部にあり」と記され、これ以降は、いろは順の記載となる。

本資料の筆者は表紙に「佐賀藩 石井忠 識」とあることから佐賀藩士石井松之助と考えられている(※)。松之助は「弘化二己年総着到」(出品資料No.3)によれば高岸村在住の石井軍右衛門の伴。元治元年(一八六四)には物成四十石で請役所書写役を務めていたことが確認できる(鍋三三一・九五「佐賀藩拾六組侍着到」※)。そして慶應三年の本資料に、筆者である石井松之助自身も物成四十石で「い」の部に記載されている。

本資料が筆写された契機は未詳だが、「な」「を」など各部が始まる丁には見出しの付箋が一部残存していることから、石井松之助の実用的な手元資料として用いられたものと思われる。請役所書写役であったという環境が関連しているのかもしれない。表紙には「他見」「秘書」、最終丁に「他見無用 石井ぞんじ」、裏表紙にも取扱いを厳しく制限する旨の墨書がある。平成六年に翻刻出版されたことで広く知られていたが、平成二十八年度に同家子孫より寄贈いただいた。

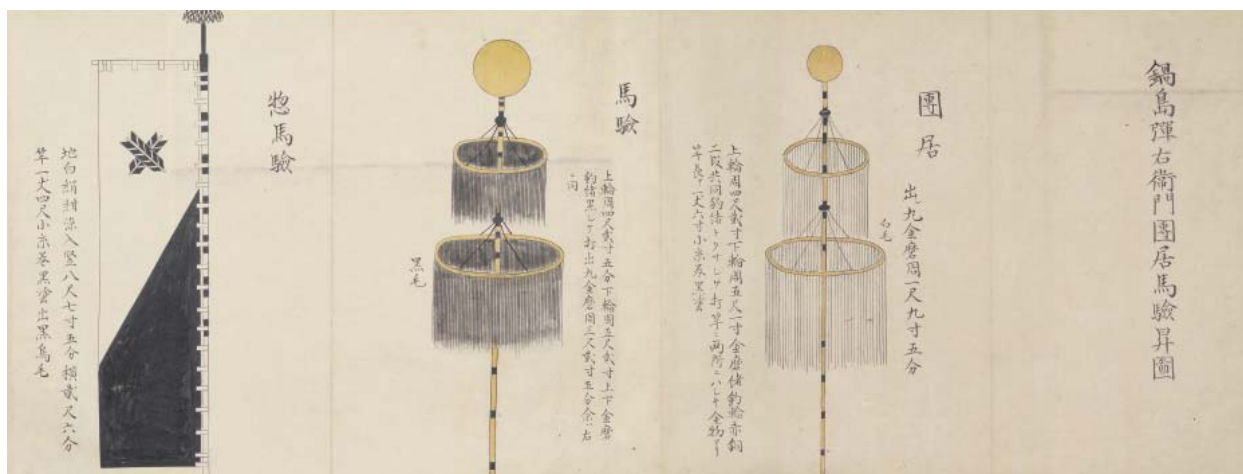
(※) 高野和人編『青柳社歴史叢書6 肥前鍋島家分限帳』青柳社、平成六年
 (※) 中野正裕「史料紹介 幕末佐賀藩の軍制について」『元治元年佐賀藩拾六組侍着到』
 『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要第七号』平成二十四年
 (参考) 生馬寛信・中野正裕「安政年間佐賀藩士―藩士名簿」『早引』『石高帳』による
 『佐賀大学文化教育学部』第十四集第一号、平成二十一年



須古鍋島家(親類同格)



倉町鍋島家(家老)



太田鍋島家(家老)

5 諸家団居馬驗昇図

一巻 江戸時代後期

縦二七・四cm 横二〇・八五・〇cm

紙本着色墨書 卷子装

公益財団法人鍋島報効会所蔵

佐賀藩重臣の二十七家について、各家の惣旗・団居・馬印など計七十一図が彩色で表されている。小城鍋島家(伊三郎)・蓮池鍋島家(撰津守)・鹿島鍋島家(和泉守)の三家をはじめ、親類(四家)・親類同格(四家)に倉町鍋島家(家老)を加えた十二家は惣旗・団居・馬印の三種が表され、その他の家老や着座など十五家については、惣旗はなく団居と馬印が中心である。

制作年代について各家当主の名乗りを手掛かりにすれば、小城鍋島家で「伊三郎」を名乗った鍋島直愈は明和元年(一七六四)に家督相続、寛政六年(一七九四)隠居。また武雄鍋島家で「能登」を名乗った茂明は宝暦五年(一七五五)に能登と改名し明和八年(一七七二)に没し茂順(千左衛門・越後)が継いでいる。こうしたことから、おおよそ明和年間頃の状況を示すものと考えられる。

こうした旗指物は長崎警備の現場でも用いられた。長崎表調練図では各家の旗指物や陣幕の意匠や紋様まで細密に描き込まれているが、例えばそこに見られる暖簾状の形状と「馬」字が特徴的な惣馬驗は、本資料に照らして原田吉右衛門家のものであることわかる(出品資料No.21参照)。その意匠の奇抜さと個性は見るものを飽きさせない。

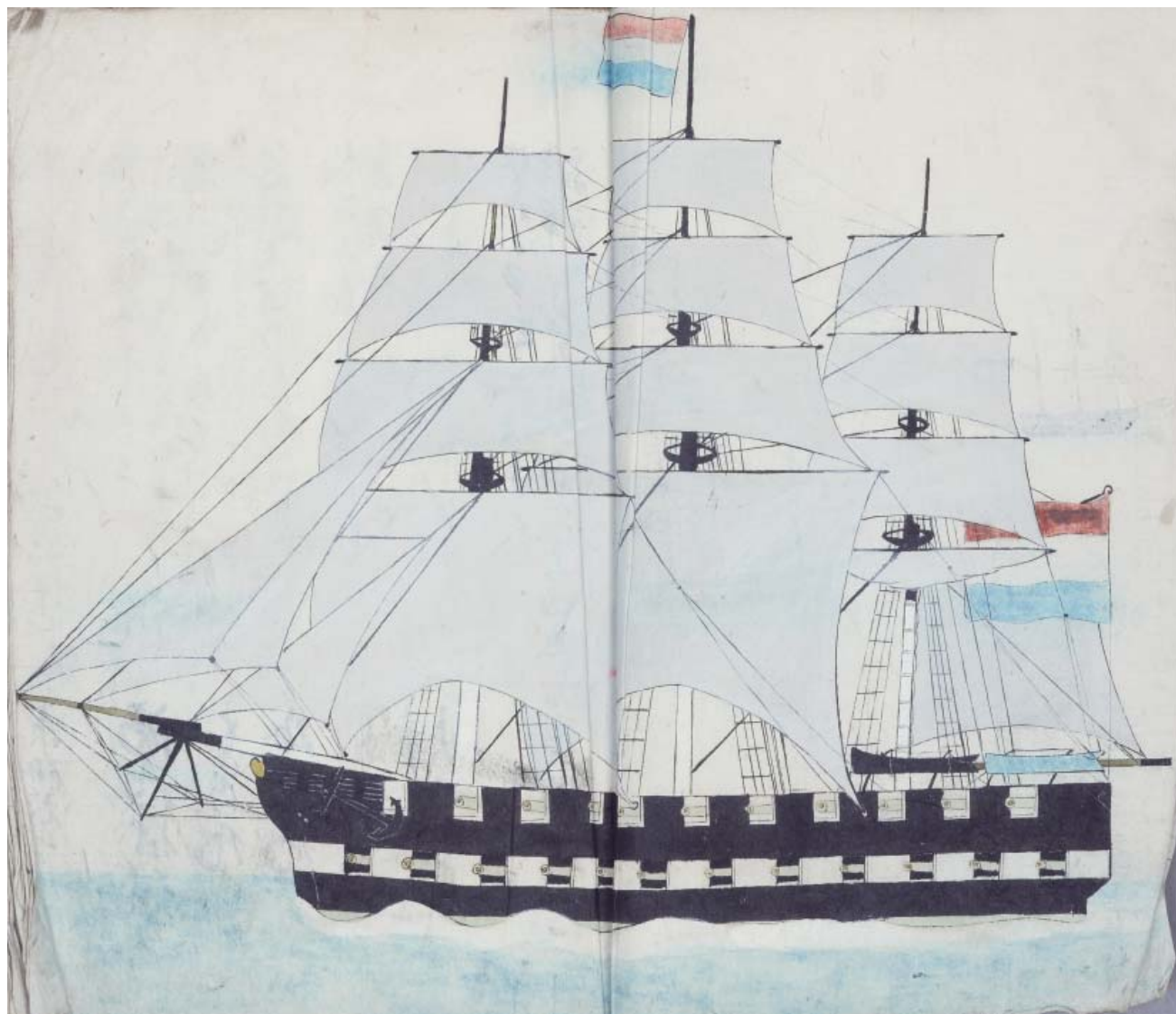


9 鍋島茂真像

一幅 江戸時代後期
縦二六・二cm 横一六・八cm 紙本着色 掛幅装
公益財団法人鍋島報効会所蔵

鍋島茂真は九代藩主鍋島齊直の十四男として文化十年（一八一三）、佐賀城で誕生。母は五男直孝（餅木鍋島家を継ぐ）を産んでいた側室の瀧浦。はじめ長之進、次いで安昌、中務と称した。九歳のときから文武稽古を開始し、しばしば弘道館へも出た。但し年齢についてはこの年「学四郎殿（のち直永）御同年につき、長之進様御年御四ツ御減らし、御五歳」とされている（鍋二二三四「茂真公御日喜越方記録」）。齊直の仰せにより文政八年（一八二五）に須古鍋島家を継いだ。文政十三年、十代藩主に就任した直正が初入部するや、茂真は着国の御礼使者を命じられ、九月には請役鍋島茂順（武雄鍋島家）の差次（代理補佐）となった。同三年には鍋島茂啓（村田鍋島家）に代わり弘道館頭人（学館頭人、同六年には請役当役（執政）に任じられ、外向き（行政府）のトップに就いた。御側のトップに当たる御年寄役の古賀穀堂はその日の日記に「須古大夫茂真」執政となる。時に監物大夫（太田・茂矩／のち天保九年没）と両執政なり。須古貴介公子、少年英気、学問の力大いに進む。喜ぶべし」と称賛している（*）。翌月には御仕組所兼帯となり、藩主直正の右腕として藩政をリードしていくことになる。慶応二年（一八六六）没（五十四歳）。墓所は杵島郡白石町の陽興寺にある須古鍋島家御霊屋にあり、花杏葉紋の刻まれた墓石のもとに眠っている。

（*）『琴鶴堂日史』天保六年五月十六日条、公益財団法人鍋島報効会所蔵
『佐賀県近世史料』第八編第四卷、佐賀県立図書館、平成二十五年



19 オランダ軍艦パレンバン号

白帆注進外国船出入注進 一冊(三冊のうち第二冊)

江戸時代後期 縦二四・四cm 横一六・五cm 紙本墨書着色 冊子装

公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋二五・二五六)

「白帆注進外国船出入注進」は、天保十五年(一八四四)〜慶応四年(一八六八)の長崎警備に関する藩士の日記。記主は複数人によるとみられるが、白帆注進やそれを受けた番船の出動状況が詳細なため、警備に動員された船手の構成員によるものと考えられている。日記部分に加え、その時々長崎港に出入港した外国艦船や幕府・諸藩の船舶の彩色図や、その際に警備にあたった佐賀藩の船や台場の配備を記した見取り図が豊富に含まれていることも本資料を特徴づけている*。

本資料での最初の船舶の入港は、「(天保十五年)六月十八日(十六日)、蘭船入津これ有り。右蘭船より相糺され、来る七月二日迄の内、阿蘭陀本國船渡来に相成り候、すなわち使節船(軍艦)の近々の来航を伝えるオランダ船の入港である。この情報が佐賀城に届いたのは同月十八日。夜中にも関わらず請役当役茂真はじめ役々が登城し、夜明け頃には直正も臨席の上で協議が続いた(私記)。翌日に直正は御側四組の中から侍五十人を引き連れ長崎へ出発。通常は四日間を要する道中を三日間で移動した。ただ、予告された使節船の入港を待たずに直正は一旦帰城。使節船は「七月二日卯上刻、白帆壹艘注進これ有り」として七月二日に姿を現した。アヘン戦争の結果を受け、幕府に開国を勧告するオランダ国王の国書をもたらす使節船パレンバン号である(図版)。この報を受けた直正は再度長崎に赴き御奉行らと対談。両御番所や一部の御台場を巡見の上、異常なしとして帰城した。直正が同船に乗船して視察するのは、この後の九月巡見の際である(出品資料No.20)。

二度目の巡見から帰城した直正は「追々大銃御鑄立て等も仰せ付けらる」と予告し、八月六日に「蘭筒百挺新製」を命じた(直正公譜)。天保十一年の岩田台場における西洋砲術視察を機に洋式砲の充実に図られ、天保十五年に限っても、オランダ渡りのモルチール砲の伊王島への配備、御火術方の創設、十五御茶屋での洋式砲鑄造などが続いた直後にパレンバン号の入港を迎えている。九月の艦内視察は貴重な体験であったが、すでに二度目の巡見で図版にあるような船腹に巨砲を積載した軍艦仕立ての外観を眼の当たりにしたことなどで洋式砲量産の必要性をより強く感じ、帰城直後の百挺製造の指示となったのだろう。

(※小宮大代良『白帆注進外国船出入注進』解題『佐賀県近世史料第五編第一巻』佐賀県立図書館、平成二十七年

蒸気機関研究と精煉方

32 蒸気車雛形 一点

長三九・八cm 高三一・五cm 幅一四・〇cm

33 蒸気船雛形(外輪船) 一点

長八八・〇cm 幅一八・六cm 高五二・五cm

安政二年(一八五五)頃 佐賀藩精煉方製
佐賀県重要文化財
公益財団法人鍋島報効会所蔵



蒸気船雛形(外輪船)

嘉永六年(一八五三)ロシア船の長崎来航の少し前にあたる七月五日、直正は御側に車船製造方を新設し、隠居していた茂義(武雄鍋島家/直正義兄)に惣心遣を仰せ付け、取り調べ懸り合い等も命じた(直正公御年譜地取)。その二日後には、かねて蒸気船雛形入手の手配を命じていた長崎の高嶋作兵衛より、「幸い九間位の右船、咬留(口篇+留)吧(ジャカルタ)にこれ有るにつき、御注文これ有り候はば持ち渡るべく蘭人申し聞かせ候」との報が池田半九郎に入っている(私記)。同年十一月には、福岡藩から大船建造についての同意が得られたことから、直正は「火船仕立て候につきての書面取り立て候よう御意」を下した(癸丑冬點心録)十一月二十三日条。

直正はすでに嘉永三年に城南南東に位置する大託間で「田中伴右衛門工夫の車船御覽遊ばされ」ているが(鍋島夏雲日記)出品資料No.27)、洋式船を主力とする海軍創設動きが本格化するのと同六・七年頃からである。嘉永七年の「御目通并公用諸控」(茂真記/出品資料No.16)にも「蒸気車雛形近々拝見」、「中村奇輔申し候は、蒸気車よりは蒸気船は製作易し」などの情報が直正臨席の御仕組所で共有されている(閏七月九日条)。同年九月には、蘭船持ち渡りの蒸気船雛形が、のちの三重津海軍所に程近い城南南郊の寺井に運び込まれ、周囲に目隠しの幕を張った上で操縦されている(白帆注進外国船出入注進)九月二十日条/出品資料No.19)。そして安政二年(一八五五)頃に藩内で製造された蒸気機関の雛形がこの二点である。

蒸気車や蒸気船雛形を製造した精煉方が設置されたのは、築地反射炉で大砲製造の試行錯誤が続いていた嘉永五年。煙硝研究や火薬製造などを担う目的で設置され、その場所には城下北郊の高岸にあった横岳鍋島家(家老)屋敷が充てられた。設置直後の嘉永・安政期の視察者は、直正のほか茂真やその家族、多久茂族(室は茂真娘)、御年寄役市佑の家族、諫早家(直正の娘恒姫が嫁す)など限られた数名しか知られていない(※)。

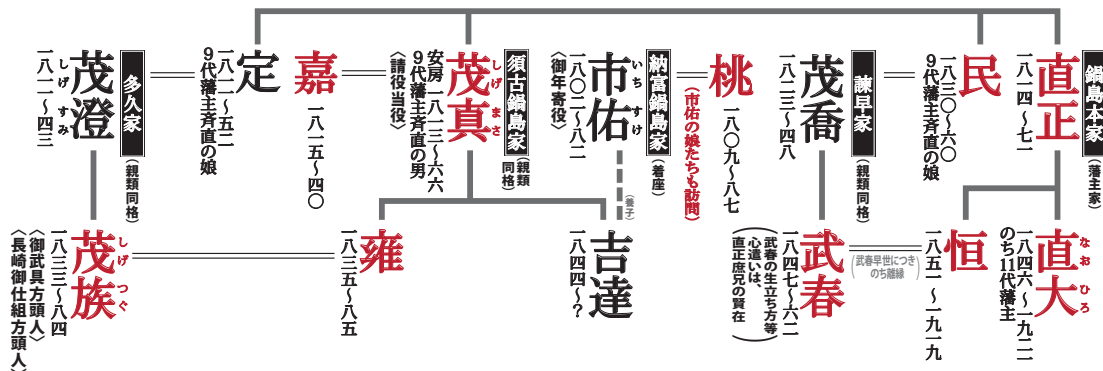
やがて広範囲に科学技術研究・製造を手掛けたが、その代表的な分野が蒸気機関研究。蒸気車雛形などを製造した安政年間には内々の見学者が増えるが、多くは藩主家か、茂真や諫早

家など、直正に近い家老たちの家族だった。

(※) 松田和子「精煉方の活動」

『幕末佐賀藩の科学技術』下 岩田書院 平成二十八年

赤文字は見学者
家老・安政期の見学者の一息



出品リスト

No.	資料名	員数	作者・所有者等	時代・年代	法量	所蔵者
第一章 ◆ 藩政と直正の兄弟たち						
1	鍋島系図	一冊		江戸時代末期	縦二九・六cm 横二〇・八cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋一・二六)
2	鍋島直正像	一幅	高木青水 筆カ	明治時代中期	縦五五・九cm 横四一・五cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
3	弘化二已年総看到	二冊		弘化二年(一八四五)	縦二六・二cm 横一八・〇cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋三三・一六二)
4	惣番秩祿	一冊	石井松之助 記	慶応三年(一八六七)	縦二六・七cm 横九・七cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(石井忠明氏寄贈)
5	諸家同居馬驗昇図	一巻		江戸時代後期	縦二七・四cm 横二〇八五・〇cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
6	直正公譜(天保五年十一月朔日条)	一冊	千住大之助 編	明治十一年(一八七八)成立	縦二六・〇cm 横一八・三cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋一三三・四〇)
7	鍋島直正公御実歴一百図(第二十二図)	一帖	古賀一郎 書	昭和八年(一九三三)	縦二二・四cm 横三〇・八cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
8	佐賀城御本丸差図	一舗		嘉永年間(一八四八〜五四)	縦八二cm 横八〇cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
9	鍋島茂真像	一幅		江戸時代後期	縦二六・二cm 横一六・八cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
10	同格系図	一冊		弘化三年(一八四六)	縦二六・二cm 横一八・八cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
11	野人亭稿	一冊	鍋島直正 詠	天保十一年(一八四〇)詠	縦二六・四cm 横一八・五cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋一四一・二二)
12	西肥聞書	一冊		天保十二年(一八四一)頃成立	縦二四・〇cm 横一六・九cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋三〇一・一一)
13	静春堂賞花	三幅対	鍋島直正 筆	嘉永二年(一八四九)	(漢詩)縦二二・六cm 横二七・一cm (短冊)縦三六・三cm 横五・九cm	佐賀県立佐賀城本丸歴史館所蔵
14	奉賀国宰清陰君世賜徽章序并詩頌	三幅対	枝吉南濤ら 筆	嘉永二年(一八四九)	(一)縦一三三・〇cm 横六一・〇cm (二)縦一三三・四cm 横六一・一cm (三)縦一三三・九cm 横六一・六cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
15	古川松根筆記	一冊	古川松根 記(写本)	江戸時代後期	縦二六・四cm 横一八・四cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋一〇九・七)
16	御目通并公用諸控	一冊	鍋島茂真 記	嘉永七年(一八五四)	縦二〇・四cm 横一三・〇cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
17	直正公譜(天保十三年五月四日条)	一冊	千住大之助 編	明治十一年(一八七八)	縦二六・〇cm 横一八・三cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋一三三・四〇)
第二章 ◆ 長崎警備と家老たち						
18	日記(天保十一年九月六日条)	一冊	坂部明矩 記	天保十一年(一八四〇)	縦二七・七cm 横一九・一cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋〇二二・一九六)
19	白帆注進外国船出入注進	一冊		江戸時代後期	縦二四・四cm 横一六・五cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋二五二・五六)
20	鍋島直正和蘭船乗込図	一巻	古川松根 筆	弘化元年(一八四四)	縦三〇・〇cm 横一三八九・五cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
21	長崎表調練図	一舗		江戸時代後期	縦一六・六cm 横二八三・七cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
22	直正公譜(嘉永五年二月五日条)	一冊	千住大之助 編	明治十一年(一八七八)	縦二六・四cm 横一八・四cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋一三三・四〇)
23	私記(嘉永六年七月十八日条)	一冊	池田半九郎 記(写本)	明治時代書写	縦二六・四cm 横一八・四cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋〇二二・七九)
24	癸丑冬點心録(嘉永六年十二月晦日条)	一冊	伊東次兵衛 記	嘉永六年(一八五三)	縦二六・四cm 横一八・四cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋〇二二・七九)
25	清陰君拜鞍鑑奉賀文	一巻	草場佩川ら 筆	嘉永七年(一八五四)	縦二四・二cm 横一六・六cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋〇二二・三七)
26	鍋島夏雲日記(嘉永六年七月三日条)	一冊	鍋島市佑 記(写本)	明治時代書写	縦二四・二cm 横一六・六cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
27	多布施公儀石火矢鑄立所図	一面	陳内松齡 筆	昭和時代初期	縦二五・九cm 横一八・七cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋〇二二・四一)
28	敬哉公御代日記(嘉永七年七月九日条)	一冊		嘉永七年(一八五四)	縦二五・九cm 横一八・七cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(鍋〇二二・四一)
29	敬哉公御代日記(嘉永七年十一月二十五日条)	一冊		嘉永七年(一八五四)	縦二五・九cm 横一八・七cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
30	佐賀藩精煉方絵図(パネル展示)	一面	陳内松齡 筆	昭和二年(一九二七)	縦七五・二cm 横一二三・〇cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
31	蒸気車雛形	一点	佐賀藩精煉方 製	安政二年(一八五五)頃	長三八・八cm 高三一・五cm 幅一四・〇cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵
32	蒸気船雛形(外輪船)	一点	佐賀藩精煉方 製	安政二年(一八五五)頃	長三八・八cm 幅一八・六cm 高五二・五cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵(佐賀県重要文化財)
34	鍋島直正公銅像模型	一軀	武石弘三郎 作	大正三年(一九一四)	総高四四・六cm	公益財団法人鍋島報効会所蔵



徴古館

The Museum CHOKOKAN

NABESHIMA